一歩

Ｌｉｔａｌｙ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
一歩

【Ｎコード】
Ｎ１６１６Ｐ

【作者名】
Ｌｉｔａｌｙ

【あらすじ】
一歩だ。一歩が大事なんだ。

今日は友達と地元の多摩センの駅前の通りでナンパをしたよ。

何人かの女の子に声をかけて、もちろんシカトもされたけど、ちゃんと向き合って話をしてくれた子もいた。

しばし話に興じてくれた女子高生の子らをバス停まで送って、その後夕飯を買いに千歳屋に行く途中「今のどうだった？」って僕が聞いたら、「左の子がめっちゃ可愛かった」とか言い出したから、慌ててダッシュでバス停まで戻って、すでにバスに乗り込んで発車を待ってたその子を発見して、ケー番を渡させた。

笑顔の可愛い子達だった。

年を重ねて、色々な経験を重ねると、自衛の為に人は保守的になって、人から声をかけられても無闇に応えたりしなくなる。
世の中には危険な事も確かにあるし、それはすごく当然の心理なのだけど、そうなってしまった人には出来ない、無垢な笑顔だった。
僕はそういうものを見ると、なんとも言えない暖かい気持ちになってしまう。
きっと、綺麗な女性になっていくんだろうな。

その後、千歳屋に行って夕飯を物色してる最中に、僕が前々からちょっと気になってた店員の子がたまたま居たから、メールアドレスを渡してきた。

いきなりでびっくりしたろうし、僕も僕で全然うまくしゃべれなかったし、彼女にも当然色々事情があるだろうし、だからメールは来ないかもだけど、それは別にいいんだ。
渡した時、嫌な顔せずに受け取ってくれた。
その温度だけで、僕の試みは十分報われてる。

「外」には危険がいっぱいある。
見慣れた安全な風景の中だけで暮らすのは楽だし、合理的だけど、不安をかみ殺して、そこから一歩外に向かって踏み出した時、そこには危険と共に可能性が溢れてもいる。

外へ向かって手を伸ばす事、外からきた「ソレ」を偏見なく受け止める事。
危険も付きまとうけど、希望はやっぱりそのリスクを背負った人に与えられるんだと思う。

しかし、そうと分かっていても、人はだんだん踏み出す事を躊躇う様になる。

声をかけると、中高生はよく立ち止まって話に耳を傾けてくれる。けれど大学生以上になってくると、止まって話をしてくれる人が極端に少なくなる。

無垢な頃って、良くも悪くも危機感が薄いってのもあるだろうけど、自身の内に沸き起こる期待感に対してすごく正直なんだとも思う。

「この出会いによって、何かが変わるかも」っていう風に。

人生経験を重ねて、様々なアレコレを見聞きして、あるいは体験して、経験則からもの判断するようになって、未知のものに触れる事を躊躇うようになる。

声をかけても素通りする子達だけじゃない。
僕もまたそうだ。

昔は何度失敗しても、恐れる事無く次の一歩を踏み出せた。
でも、次第にそれが出来なくなった。

大事なものを失くして、大事な人を失って、失う事の辛さを知って、報われない事の辛さを知って、だんだんと歩みは鈍くなっていった。

ぬくもりに触れたい、だけど怖い、だから歩みだせない。
もうあんな辛い気持ちは味わいたくない。
あんな気持ちを味わうくらいなら、もう何も手に出来なくていい。
何も求めたくない。

そんな風に、僕も閉じて枯れた大人になりつつあった。

「ちからを貸してほしい」と友達が言った。

僕は見栄っ張りで、無駄に恰好つけたがる人間だから、余裕の顔で

「よっしゃ手を貸そう」なんて言って、前に立って突撃する。

ほんとはね、怖いよ。
そりゃあ怖いさ。
手だって震える。
でも、背中を頼ってくれる人間がいるんだ。
ダサい恰好は出来ない。
そう思って、深呼吸して、覚悟きめて、突撃する。

自立の素晴らしさばかりが声高に叫ばれて、人間関係の希薄化が進む昨今だけど、時に頼る事、頼られる事も大事なんだと思う。

頼る事で、一歩を踏み出せる、一歩踏み出しちゃえば後は頑張れる人間もあろう。
頼られる事ではじめて、いい気になって見栄はって頑張れちゃう人間もあろう。

友達が「人に頼るだけ」の人間なら、僕だってちからを貸そうとは考えなかった。
彼の瞳の中に、いずれは自分の足で一歩を踏み出す意志を見て取ったから、こいつにちからを貸したいって思ったんだ。
僕も、こいつの前でいい恰好をしてやろうって思えた。

誰かに手を貸して、引っ張る際に、自分もまた今より前に一歩を踏み出す。
今日の一歩がもし失敗に終わってもいい。

今日あの瞬間感じた躍動は、またいつか次の一歩を踏み出す際の糧になるんだ。

そんな感じで、僕らはちょっとずつ前に進んでくんだ。

いい年こいて臭い事言ってると思うけど、これは本当に大事な事だと思うし、伝えたいと思うから恥を忍んで書いとく。

ナンパでもなんでもいい。
馬鹿げたやり方でも、へたくそでも、無知でもいい。

誰かと繋がりたいって願う気持ちは本当なんだ。
恐れずに、その気持ちに「まず自分が」報いてやる事が大切なんだ。

不安をかみ殺して手を伸ばそうと思うし、誰かが伸ばした手をしっかり掴んでやりたい。

だから明日も多分、またギターかついで歌いに行くと思う。

あと一年足らずで僕も３０になるけど、まあ悪くないよ。
躍動する気持ちは１０年前と何も変わってない。

明日も楽しい夜になったらいい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1616p/

一歩

2010年11月27日02時57分発行